

養豚の進め方

森谷 昇一

一昨年来、町の話題をにぎわしました豚ブームも、昨年9月の枝肉卸売価格1kg当り400円突破を頂点として下降線をたどり、最近では300円前後となり、また一時高かった仔豚価格も5,000円と云うところで、やや安定してきました。

この豚ブームが非常に養豚熱を刺激して、本県においても、去る8月1日の調査で16,600頭の豚が5,200戸の農家に飼育されるようになり、さらに増加の傾向を示しております。これは前年にくらべて約2割の3,000頭の増で、10年前に比べて3.6倍にもなっており、1戸当りの飼育頭数で見ますと、3.2頭と云うこととなります。

昭和34年2月1日の全国豚飼養頭数は、2,244,300頭で941,100戸に飼育されていますので、1戸平均では約2.4頭と云うことになり、本県の養豚が伸びたとはいっても全国に比べますと、1戸当りの飼育豚数はわずかに多いようですが、全国飼育頭数の1%にもならず、また全農家に対する養豚の普及率を見ますと、わずかに3%足らずであります。

これを全国平均で見ると約15%で、関東・九州諸県のように全農家に対する養豚の普及率が過半数を占める先進県に比較しますと、豚の資質や養豚の経営においても、はるかに後進県であると云うことがうなづけます。

一面これを肉の消費の面から検討して見ますと、昭和34年においては、昭和29年に比べて、5年間に約2倍の伸びを見せており、年間352千トンの枝肉を消費しておりますが、家畜別にその内訳を見ますと、豚が51%で過半数を占めており、かつての食肉界の王座を占めていた牛肉が、昭和32年から豚肉とその地位が逆転してきたわけです。

このように肉の消費が増加して来たために、和牛は年々約10万頭も減少しているわけで、最近では和

牛は非常に高値になってきて、本県でも、その増殖対策に苦心している状況であります。と云いますのは、牛は年1頭の仔牛の生産しかないわけですが、豚は15~16頭の仔豚を生産し、それが生後7~8カ

表1 畜産物生産の伸び(指数昭和29年=100) [全国]

区分	牛乳	と 殺 頭 数			総枝肉生産量	鶏 卵
		和牛	乳牛	仔牛		
29年	100	100	100	100	100	100
30	117	150	140	262	129	110
31	124	170	156	240	146	108
32	146	139	184	183	148	120
33	167	143	259	210	166	129
34	185 (1,717)	157 (596)	401 (109)	228 (70)	189 (352)	133 (81.5)

(注) ()は牛乳は千トンと殺頭数は千頭、枝肉は千トン、卵は億個

月で肉豚として出荷されます。しかも飼料効率、つまり、体重1kgを増加するのに要する飼料は、風乾物換算で(普通糖類などは正味重量の80~90%ですが)牛は10~12kgであるのに対して、豚はわずかに4~5kgです。このように肉の生産性においては、

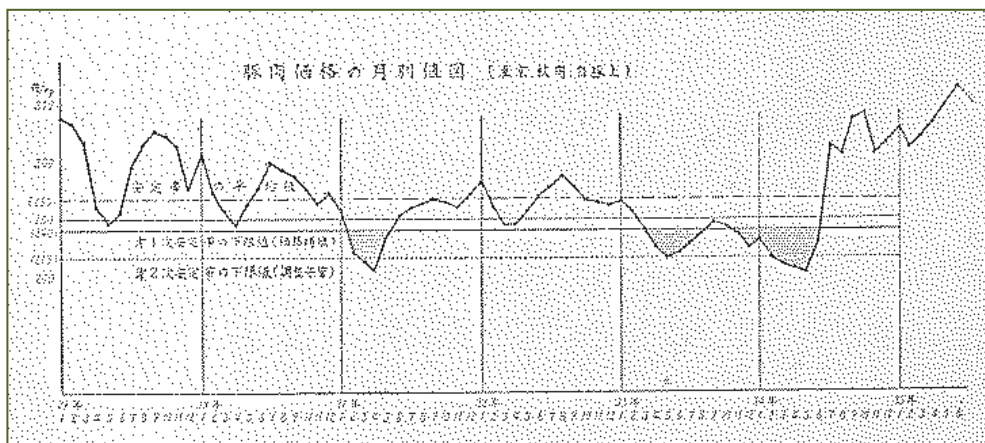


表2 枝肉生産量を100とした家畜別枝肉生産の構成比

区分	枝肉生産量総計を100として				
	計	和牛(成)	乳牛(成)	馬	豚
29年	100	42.2	3.0	12.9	39.7
30	100	50.1	3.5	8.6	33.9
31	100	45.0	3.2	8.9	39.4
32	100	37.2	3.9	6.8	49.4
33	100	34.4	4.9	6.0	52.1
34	100	33.1	6.6	6.6	51.0

(注) 仔牛、めん、山羊を除く

岡山畜産便り 1961.03

はるかに牛をしのいでいるわけで、今後食肉需要の増加に伴い、豚肉に対する課題と期待は非常に大きいわけでありませぬ。

アメリカにおける現在の食肉のホープはブロイラー一産業だと云われていますが、我が国においても10年後の全国の食肉需要量を、枝肉にして現在の約3倍の100万トンとして、その半分の50万トンを豚肉がしめ、鶏のブロイラーを30%とし、後の20%を牛肉でまかなうという研究をしており、いわば養豚はこれからの畜産の花形であります。

しかしながら豚の生産は非常に回転が早く、また肉の生産性も高く、わずかな資本で容易に飼育できるなどのために、高値に刺激されての異常な増産、安値に刺激されての投売りのために、たえず需給と供給のバランスがくずれ、不安定な価格形成を見ており、世界各国とも所謂ビック・サイクルとして、この周期的な価格変動に頭をなやましています。特に我国のように2～3頭飼いの副業的小規模経営においては、安定した養豚経営のために大きな障害となっております。

また豚は発育が非常に早く、飼料効率は高いのですが、それだけ短期間に多量の飼料を摂取しなければならぬわけで、牛馬めん山羊などに較べて消化器の容積が特に小さく、飼料の消化率も低いので、一時的に多食することも困難ですから、栄養価が高く、容積の小さい、消化し易い、いわゆる濃厚飼料を中心に飼育しなければなりません。

牛の濃厚飼料所要量は10～20%であります。豚は鶏と同様に全体の80%以上を濃厚飼料でまかなわなければなりません。と云うわけで、養豚の生産費を見ましても、飼料費が60～70%をしめ、飼料対策如何が養豚経営の成否の鍵になっております。

そこで今までの養豚を振返って見ますと、できるだけ安い飼料で収益をあげると云う考え方から、都市近郊の特殊な残飯養豚であったり、農家の畑作残さい物利用による1～2頭飼いの副業養豚であったわけですね。

最近になって、畜産の企業化が各所に見聞されるようになってきて、全所要飼料を購入飼料でまかなう大規模養豚が始められておりますが、この場合においても、近頃のように豚肉価格の好況の時には引

き合うわけですが、枝肉価格kg当り250円を割るようになりますと、経営は困難となって来ます。

○養豚経営の採算性

肉豚(生体) 375g(100匁) 当りの価格——いも 7.5kg(2貫目) 以上

仔豚(生後60日 12～13kg) 1頭の価格——いも 375kg(100貫目) 以上

飼料費—生産費の60～70%

自給率70～80%

10a当りいも3,750kg(1,000貫目) —肉豚3頭の飼料

農林省九州農業試験場畜産部栗原武氏によりますと、農家養豚の場合、畑10a当りの甘藷一作で、いもをつるを利用して、肉豚3頭が6カ月間で育成できる計算になり(注1)10a当り30,000円の粗収入になる(注2)としております。

(注1) いも2,625kg、つる2,250kgとして、つるをいも換算で1/3とすれば、10a当り甘藷3,375kgの生産があり、90kgの肉豚1頭生産には、いも換算で1,100kg～1,200kgを要するのでこの計算となる。

(注2) 枝肉価格を265円(適正価格)とすれば、1頭当り15,000円で販売できるから、3頭で45,000円、仔豚代金その他を15,000円とすればこうなる。

これは全所要飼料を甘藷換算したもので、自給飼料による養豚と云っても、かならずしも収穫した飼料を全部豚に給与するのではなく、豚の育成肥育には、大豆粕、魚粉などの蛋白質飼料も10～20%、ぬか類30～40%、穀類10～20%、青草または野菜くず20%程度も必要なわけですから、収穫した自給飼料を栄養価で換算して、例えば、いもを10kg売って、生澱粉粕30kg、またいも30kg売って糠類10kg以上(いも40kg—配合飼料10kg以上)買えれば、自給飼料のいもを売って飼料を購入した方が良いでしょう。

このように農家養豚においては、自給飼料の生産によって、できるだけ安い飼料で豚を飼うと云うことが第一ですので、可能なかぎり畑地を充分活用して、いも糠サイレージ、いも糠飼料などをつくり、少なくとも給与飼料の50～60%以上を自給飼料でま

岡山畜産便り 1961.03

かなうように心がけますと、豚肉価格がさがっても、
 投売りすることがさげられます。

次に昨今では、従来の1～2頭飼いの副業養豚で
 はなくて、少なくとも農家収入の50～70%を養豚部
 門であげると云う、多頭飼育が必要とされておしま
 す。

それでは1戸の農家が何頭位の豚を飼育するのか
 適正かと云う問題ですが、一般の農家養豚におい
 ては、飼育する頭数を決定する前に、まず、どの程
 度の飼料が自給できるかを算出して、豚の年間飼育
 頭数を決定すべきではないかと思ひます。かりにこ
 れを1戸当り、肉豚20頭を年間常時飼育する程度
 の養豚農家であるとしますと、30～40aの自給飼
 料畑を必要とし、肉豚20頭を6カ月肥育で年間2
 回転すれば、40頭と云うことになり、肉豚1頭を
 15,000円とすれば600千円の粗収入となり、諸経
 費をザット44千円とすると、16千円の所得が
 生まれて参ります。このように将来の養豚は、副
 業的要素を脱皮して、多頭飼育として進めて行く
 必要があります。

また、畑地帯の中小農家は、農協を中心にして、
 強固な生産共同体をつくり、年間肉豚500～1,000
 頭出荷目標の共同飼育も大きな課題として浮ん
 できます。そして、農協中心にした、肉用もと豚の
 共同購入、飼料の共同購入、飼料調整機械の共同
 利用、(生産共同体の)豚舎、サイロなどの建設に
 要する資金の融資、肉豚の枝肉市場への共同出
 荷、養豚技術の研修などが必要となつて来ると思
 われます。

養豚は他の家畜にくらべて、非常に労力が少
 なくてすみませんが、豚舎の新設については、従
 来の一豚房一頭主義をやめて、デンマーク式豚
 舎と云われるようなものにして、2坪(6～7平方
 m)程度で、5～6頭の肉豚を飼育、廊下式の
 便所を別に設けて、清潔にし、飼料の給与、豚
 舎の清掃作業などの労力を節減するように工夫
 しなければなりません。

○肉豚の生産目標

- ①100 kg (27%) 日令 生後 240 日以内
- ②1 kg増体所要飼料(風乾量) 40 kg以内
- ③赤肉量=40%以上(絶食体重) 温体—37 kg以上

生体量=

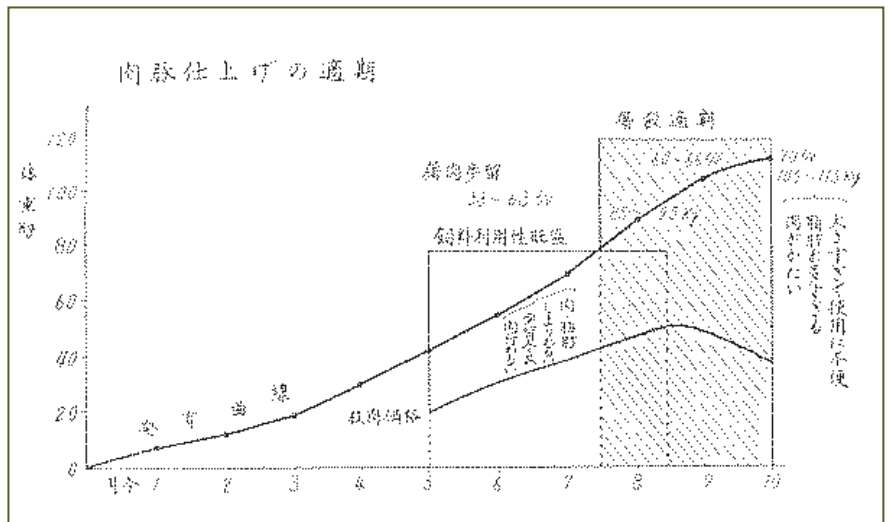
④90 kg (24%) の場合は生後 210 日以内 脂肪の

厚さ 1.5 cm～4 cm

枝肉 赤肉 60 脂肪 30

骨 10 脂肪 1.5～3 cm

肉豚の育成、肥育計画については、10～12 kgの
 離乳直後の仔豚を、6カ月間以内に肥育して、90 kg
 ～100 kgで出荷するように心掛け、70 kg前後の
 小貫ものや、100 kg以上の大貫ものとしないう
 ちに、食肉市場で上物として優利に取り引きさ
 れる枝肉、つまり赤肉60、脂肪30、骨10%の
 割合で、脊中の脂肪の厚さが2～3 cmのもの
 をつくりあげようと思ひます。そのためにはも
 と豚の選定、仔豚の育成、飼料の給与など
 について平素から充分研究しま



して、規格のそろったものを出荷することも必要
 です。

また、出荷時期についても、できるだけ枝肉
 価格の高い8～9月の土用肉や、12～1月の正月
 肉や、3～4月の花見肉に出荷できるようにす
 ることも大切ですが、今後の加工肉原料として
 の需要が一段とふえて来る見通しですから、年
 間を通じて平均して出荷することも必要とな
 ってきます。そこで繁殖豚については、従来
 主として春秋2回仔豚を取っていましたが、
 できるだけ離乳を早くして、母豚の快復を
 早め、人工乳、山羊乳、脱脂粉乳などで仔
 豚を育成して、2年間に5腹の仔豚を生産す
 るようにしなければなりません。要するに食
 肉の需要は増加の一途をたどっており、肉
 豚の正常な増産に対する要望は非常に高く、
 国においても目下肉畜の価格安定施策につ
 いて検討中で、近く農協を中心にした肉畜の

岡山畜産便り 1961.03

共同出荷を通じて、売上金の積立とともに、同額の補助金によって、枝肉 1 kgの卸売価格を平均 265 円程度の安定価格に保証するよう研究されています。

本県においても、畑地率の高い地域では自給飼料による農家養豚は、将来非常に有望であると考えられますが農家の方々もなお一段と養豚について御研究を願い、将来は本県においても、20～30 万頭の豚を飼育して、年間 30～40 万頭の肉豚を食肉市場へ供給したいものです。

(筆者 畜産課技師)